HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | Liest sich der Satz komisch? |
| Author(s) | 江口, 豊 |
| Citation | 独語独文学科研究年報, 16, 19-40 |
| Issue Date | 1990-01 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/25798 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 16_P19-40.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# Liest sich der Satz komisch?

江口　豊

## 0. 序

ドイツ語には、ラテン系の言語からの影響もあり、以下のような構文がある。[1]

(1) Die Tür öffnet sich.

(2) Die Tablette löst sich auf.

(3) Dieses Wort spricht sich einfach aus.

(4) Das Auto verkauft sich gut.

これらについては、英語、オランダ語、そして勿論フランス語にも、類似の現象が存在する。

(5) Bureaucrats bribe easily. (Keyser / Roeper 1984 : 384)

(6) The wall paints easily. (ibid.)

(7) Het nieuwe bed slaapt heerlijk. (Abraham 1987 a : 55)

(8) Deze vloer danst lekker. (ibid.)

(9) Cette racine se mange. (Abraham 1987 a : 66)

(10) Le francais s'apprend facilement. (Abraham 1987 a : 67)

この四つの言語のいわゆる中動構文に関する制限は、Abraham (1987 b) に述べられているので、以下に表の形にまとめておく。[2]

〔A〕

| | 自動詞の中動化 | 他動詞の中動化 | 中動構文が属性表現に限定される |
|---|---|---|---|
| フランス語 | − | + | − |
| 英　　語 | − | + | + |
| オランダ語 | + | − | + |
| ドイツ語 | + | + | ± |

さて、ドイツ語の中動構文について言うならば、概ね以下の法的意味を含んだ werden-受動と等価と見なされている。[3] (1) から (4) の文については、(1a) から (4a) のパラフレーズが考えられる。

(1a) Die Tür kann geöffnet werden.

(2a) Die Tablette kann aufgelöst werden.

(3a) Dieses Wort kann einfach ausgesprochen werden.

(4a) Das Auto kann gut verkauft werden.

表面上、ドイツ語の中動構文はすべて再帰代名詞 sich を伴うことで、再帰構文の一変異ともとれる。しかし、多くの文法書[4]が、その意味的な面から、この中動構文を受動構文の変異として把えているのも事実である。そして、こうした受動の変異との見方は、Brinker[5]から批判もされ、両者を峻別すべきことも唱えられている。

本論では、現代ドイツ語における、これら中動構文の位置付けを再確認し、その成立条件や機能を探ろうとした。

## 1. 考察の対象

### 1.1. 対象の限定

まず、本論で取り扱おうとする対象を Haider (1985) などを参考に限定することから始めよう。中動構文には、必ず再帰代名詞が含まれることから、出発点としては、広義の再帰構文、即ち、sich を伴うすべての文が対象となる。以下の四点が、Haider[6]の言う再帰構文の特徴である。

(11)( i ) sich を用いる。

( ii ) werden, sein を伴う受動化は不可能である。

(iii) 常に主格名詞句が義務的に存在する。

(iv) 完了の助動詞として haben を取る。

無論、すべての再帰構文が中動構文である訳ではない。一般的には、再帰構文そのものについて、二つの下位クラスに区分することが行なわれている。[7]その動詞が再帰代名詞とのみ用いられるものとそうでないものの二種類である。Haider は Reis[8]の三分類を踏襲している。[9]

A. 前方照応的 sich を伴う構文

(a) 再帰構文

(12) $Sie_i$ betrachtet $sich_i$ im Spiegel.

(13) $Sie_i$ sah das ihr vertraute Gesicht vor $sich_i$.

(b) 相互構文

(14) $Wir_i$ würden $aneinander_i$ vorbeigehen und $uns_i$ $einander_i$ nicht erkennen.

B. 語彙的 sich を伴う構文

(15) $Sie_i$ will $sich_i$ erholen.

(16) $Sie_i$ schämte $sich_i$.

(17) Der $Abgabetermin_i$ verschiebt $sich_i$.

C. 中動的 sich を伴う構文

(18) Der Wein trinkt sich gut.

(19) Hier läßt es sich leben.

(20) Hier sitzt es sich angenehm.

この三つの下位クラスをたてるに際しては、以下の五つの基準が認定されて、まず、純粋再帰 (A) と非純粋再帰 (B 及び C) との二分割が行なわれている

(i) Koordination

再帰代名詞と他の名詞句とを同じ文法機能のポジションで連ねることができるか。

(ii) Vorfeldfähig

再帰代名詞 sich を前域の Topik のポジションにおけるか。

(iii) Erfragbar

再帰代名詞の部分のみを疑問化の際の焦点とすることができ、かつ再帰代名詞で、その問いに答えられるか。

(iv) Modifizierbar

再帰代名詞を強調したりする修飾が許されるか。

(v) Attributiv negierbar

再帰代名詞のみを否定の作用域の対象とすることができるか。

これら五つの基準を上記の再帰構文の下位クラスA、B、C、に適用すると、以下のような結果がでる。

〔B〕

| 基準 ＼ 下位クラス | 前方照応の sich | 語彙的な sich | 中動の sich |
|---|---|---|---|
| (i) Koordination | + | − | − |
| (ii) Vorfeldfähig | + | − | − |
| (iii) Erfragbar | + | − | − |
| (iv) Modifizierbar | + | − | − |
| (v) Attributiv negierbar | + | − | − |

これら五つの基準についての代表的な例文として以下のようなものが挙げられている。[10]

A. 前方照応的 sich

(21) Er wusch sich und Kinder.

(22) Sich hat Hans am meisten gelobt.

(23) Wen rasiert er ? Sich !

(24) Otto rasiert sogar sich.

(25) Otto rasiert wochentags nicht sich, sondern seine Kunden.

B. 語彙的 sich

(26)* Er erholt sich und ihn.

(27)* Sich öffnete die Tür.[11]

(28)* Wen erholt Otto? Sich.

(29)* Otto erholt sogar sich.

(30)* Otto erholt sonntags nicht sich, …….

C. 中動的 sich

(31)* Das Buch verkauft sich und X gut.

(32)* Sich hat das Buch gut verkauft.

(33)* Wen hat das Buch gut verkauft? Sich!

(34)* Das Buch hat nur sich gut verkauft.

(35)* Das Buch hat nicht sich, sondern … gut verkauft.

上記の五つの基準によって、AのクラスをB、Cのクラスから区分けすることができるが、HaiderはBとCのクラスの動詞群について明示的区別を行なわないままにしている。

この再帰代名詞用法の二分法に対応するように、Abraham も五つの点を指摘している。[12]

〔C〕 中動 sich の再帰用法 sich に対する特徴

1. 副詞句成分を義務的にとる
2. punktuell な時間の副詞句または節をとれない。
3. 名詞句の意味役割の配置

mV : NP 〔PATIENS〕 – V – sich 〔?〕　　※ mV=mediales Verb

⇕

再帰 sich の場合

rV : NP 〔PATIENS〕 – sich 〔PATIENS〕 – V　　※ rV=reflexives Verb

4. sich selbst のような強調形は不可能
5. 不定句にして埋め込みができるのは、くり上げ動詞だけでコントロール動詞の場合は不可能。(sich の用法が再帰的と中動的の両義性を持った場合)

Haider は G. B. 理論の枠組の中で、この中動構文を統一的に説明できるとしている。しかも、Haider は中動化を統語上のプロセスと見ているのである。それは、(36) にあげる彼の中動化の定義に読みとれよう。[13]

(36) 中動構文化

問題となる動詞本来の意味役割は sich によって取り込まれるが、項ポジションの一つが非項

ポジションとなる統語プロセス。[14]

この定義に付随して、Haiderが指摘している点を引用しておこう。

(37)(ⅰ)その動詞本来の外項が担う意味役割「行為者」が、中動構文中で“von / durch + NP”という形で表わせないことから、G. B. 理論の$\theta$規準を満たすために、この意味役割がすでに他の成分に担われていると考える。ここで問題にされうるのは、文中のsichのみである。[15]
(ⅱ)sichは如何なる場合も先行詞をとるという立場と、「対象」の意味役割を担う成分が主語に立つということから、sichは意味役割は持つが項のポジションを保持しない。再帰用法のsichは、意味役割も、項のポジションも保持している。自動詞の中動化の場合（例文(20)参照)、先行詞として“es”が必要なことも、これで説明できる。[16]

Haider自身が挙げている中動構文には以下のような例がある。

(38) Das sagt sich leicht. (Haider 1985 : 245)

(39) Die Schuhe tragen sich gut. (ibid.)

(40) Dieser Satz liest sich seltsam. (ibid.)

(41) Wie es sich in Holland träumt und wie es sich wacht. (Paul 1920 : Ⅲ : 29)

(42) Es sitzt sich da angenehm. (Haider 1985 : 245)

(38)から(42)の文は各々副詞的成分を持っており、それを欠くと非文になるものばかりである。これに対して、こうした副詞的成分を必要としない場合をHaiderは中動動詞(Mediale Verben)と呼んでいる。Haiderはこれを統語プロセスではなく、語彙上の変異として把えている。[17]

(43) Die Erde dreht sich um die Sonne.

(44) Die Bäume biegen sich im Wind.

(45) Ihre Haare spalten sich.

(46) Das Wetter ändert sich.

上記の中動動詞の例文中の下線部に注目すれば、それが単独動詞としても使われることに気付く。ドイツ語動詞には、中動動詞のように再帰代名詞と共起することはできても、その基礎となる動詞単独では用いられないものもある。それが固有再帰動詞(inhärentes Reflexivverb)である。[18]この点は、(43)～(46)と(43a)～(46a)、または(47)～(49)と(47a)～(49a)とを対照されたい。

(43a) Ich drehte die Kaffeemühle.

(44a) Die Maschine bog das Holz.

(45a) Er spaltet das Holz.

(46a) Wir änderten das Programm.

(47) Wir erholen uns am Meer.

(47a)*Die Landschaft erholt uns.

(48) Ich schäme mich entsetzlich.

(48a)*Die Tat schämt mich.

(49) Er hat sich in sie verliebt.

(49a)*Sie verliebt ihn.

中動動詞は、ここで考察の対象に含めてもよいと考えられる。というのも、Reisの五つの基準に照らせば、(43)から(46)の例は再帰的なsichを含まないことが判明するからである。

他方、固有再帰動詞の場合、それ自体が中動化の例とは考えられない。何故なら、これらの文を更に中動化することが出来るからである。この点は後で例を挙げながら見ていくことにする。

さて、Haiderのこうした中動構文の把え方に対して、Abrahamは幾つか重要な批判をして、別の中動化メカニズムの展開を試みている。[19]

特にAbrahamは、Haiderのsichの扱いを批判している。即ち、sichに〔－項ポジション、＋意味役割〕という性格付けを与えることはできず、〔－項ポジション、－意味役割〕とすべきだとしている。そして、この批判はG. B. 理論の柱の一つである$\theta$基準からも支持されるであろう。

(50) $\theta$基準

各項は唯一つの$\theta$役割を持ち、各$\theta$役割は唯一つの項に付与される。[20]

項でもないsichに意味役割（＝$\theta$役割）は付与できないということである。Abrahamは結論として、sichを単なる接辞化した中動マーカーと把えているのである。

結局、本論で対象に取りあげるべきは、前方照応的なsich以外のすべてのsichを用いた構文となる。

### 1.2. 対象の分類

ここで、従来の研究で例文として取りあげられたものも含め、新たにインフォーマント・テストで確認できた資料を分類して、上記の分析を継続してみよう。まず、中動構文を、その基礎となる動詞の種類に従って観察することから始めたい。基礎となるのは、他動詞、自動詞、固有再帰動詞の三つである。

（Ⅰ） 他動詞

ここでの他動詞の定義は、その動詞が主格主語の他に、義務的に対格目的語を取る場合である。但し、二項動詞に限らず、動詞の項が三つ以上あっても、対格目的語を取る限り、他動詞として扱う。例を挙げてみよう。

(51) Das Tor schließt sich.

(52) Das Fenster öffnet sich.

(53) Der Wein trinkt sich gut. (Haider 1985 : 225)

(54) Das sagt sich leicht. (ibid. : 245)

(55) Das Auto verkauft sich gut.

(56) Das Problem löst sich einfach.

(57) Schöne Erinnerung vergißt sich nicht einfach.

(58) Seine Werke aus der Pariser Zeit finden sich relativ schwer.

(59) Das Holz biegt sich schwer. (Abraham 1987a : 51)

(60) Solche Pläne zerschlagen sich leicht.

(51) から (60) の例は、下線の動詞単独で対格目的語を取る場合である。すべての他動詞について中動構文が可能ではないことは、Brinker[21] によって指摘されている。即ち、問題となる他動詞に意味素性〔＋行為 (Aktion)〕が欠けている場合は、明らかに中動構文が非文となる。

(61)* Das Geld braucht sich immer leicht.

(62)* Solche Chemikalien enthalten sich nicht risikofrei.

(63)* Die Stadt kennt sich ganz einfach.

(64)* Ein solcher Riesenbesitz hat sich leicht.

但し、(61) から (64) までの文に使われている動詞は werden を用いた受動化も、その意味特性のために不可能である。

(65)* Das Geld wird gebraucht.

(66)* Solche Chemikalien werden enthalten.

(67)* Die Stadt wird gekannt.

(68)* Ein solcher Riesenbesitz wird gehabt.

勿論、中動化の適用範囲が werden 受動のそれと同じというのではない。以下の例は、中動化は不可能でも werden 受動が可能な動詞である。[22] [23]

(69)* Seine Stimme hört sich leicht.

(70)* Die Suppe ißt sich gut / einfach.

(71)* Die Gemälde sehen sich angenehm.

(72)* Ein gutes Ergebnis erwartet sich nicht leicht.

しかし、逆の場合、即ち、中動化が可能で werden 受動が不可能な他動詞の例は無いようである。従って、中動化の適用範囲は werden 受動のそれよりも狭いことになる。これは、両者の生産性という点でも納得できる。結局、他動詞中動化の条件として挙げ得るのは、その動詞の持つ意味素性〔＋行為〕の存在であろう。(例外があることは既に触れた)

ところで、(51) から (60) の例を見るまでもなく、Brinker の指摘通り、他動詞の中動化には二つの異なるタイプがある。[24] 第一のタイプは、leicht / schwer 等の副詞的成分を必ず取るもので、第二は副詞的成分を必要としないものである。

A 副詞的成分を必要としないタイプ[25]

(73) Die Tür öffnet sich. (=(1))

(74) Die Tablette löst sich auf. (=(2))

(75) Dicke, gepolsterte Tür schließen sich hinter ihnen. (Brinker 1969 : 6)

(76) Schabers kleine Barbierkasse füllt sich,….(ibid. : 7)

(77) In anderen Gegenden haben … Ferienorte, deren Hotels sich leerten, als es zu ungewohnter Jahreszeit in Strömen goß, gegen Krick Klage eingereicht. (ibid.)

(78) Aber wenn sich … einmal eine Gelegenheit bieten sollte, daß sich Ihnen eine Nachricht geben könnte, … dann würde ich das natürlich mit Freuden tun.

(79) Für besonders magenempfindliche Personen empfiehlt sich die Einnahme nach dem Essen …. (ibid.)

(80) Ihre (der Wanderarbeiter) Erwartungen erfüllten sich nicht. (ibid.)

(81) Sein Wesen hatte sich in dieser Atmosphäre geformt.

(82) Steckt Wunschgetreu hinter dem zeitraubenden Unsinn ?
Das wird sich zeigen, aber an den Dunglader wird in nächster Zeit nicht zu denken sein. (ibid.)

Haider が独立したグループとしてたてた中動動詞も、このタイプに含めることができると考えられる。[26] 中動動詞の定義として、副詞的成分をとらないものというのがあげられていたからである。しかし、この第一のタイプに共通するのは、副詞的成分を添加した場合も存在するということである。例文 (73)、(74) あるいは (43)、(44)、(45)、に leicht / einfach などを付加しても文法的な文が得られる点に着目されたい。これに対して、二番目のタイプ、即ち、常に副詞的成分を取る他動詞の中動化の場合、副詞的成分を取り除くと非文になってしまう。

B. 副詞的成分を必要とするタイプ

(83) Der Wein trinkt sich gut. (=(53))

(84) Das Zimmer heizt sich leicht. (Brinker 1969 : 8)

(85) Das Buch liest sich schwer.

(86) Das Land regiert sich leicht.

(87) Die neue Theorie über das Universum versteht sich leicht.

(83a)*Der Wein trinkt sich.

(84a)*Das Zimmer heizt sich.

(85a)*Das Buch liest sich.

(86a)*Das Land regiert sich.

(87a)*Die neue Theorie über das Universum versteht sich.

Brinker も認めるように、[27]A と B のタイプの分布を統一的に説明できるような意味条件などは残念ながら見出せない。ただし、両方の中動表現には本質的な相異があることは触れなければならない。Abraham が挙げた中動 sich 構文の特徴の 1 及び 2 に反するのが A のタイプである点であり、B のタイプは Abraham の定義に沿ったものということができる。[28] 尚、この点は次章でまたふれる。

（Ⅱ） 自動詞及び自動詞用法[29]

ドイツ語の中動構文の特性として、英語やフランス語[30]では不可能な自動詞からの中動化の存在が言われている。[31] ここでは対象となる自動詞とは、一項動詞もしくは、対格を取らない多項動詞ということになる。Haider の用語を借りれば、構造格を付与される構造項が一つしかないものということである。[32] まず例を挙げる。

(88) Es lebt sich gut als Sekretärin in Bonn. (Brinker 1969 : 9)

(89) Ohne den großen Trubel ringsum gratuliert es sich besser. (ibid.)

(90) So schnell stirbt es sich nicht. (ibid.)

(91) Es lächelt sich leicht, wenn man zum Frühstück zwei Eier gegessen hat. (ibid.)

(92) Wirklich finster wurde es nur im kalten Sibirien, und da träumte sich's im warmen Bett doch besser ··· . (ibid.)

(93) Es schläft sich schlecht auf dem blanken Fußboden. (ibid.)

(94) Auf solche Fragen antwortet es sich schwer.

(95) Auf der Autobahn fährt es sich auch nicht mehr so angenehm. (Abraham 1987a : 54)

(88) から (95) で用いられている動詞は、原則的には対格目的語を取らない[33]ものばかりであるのに対して、以下の例文に用いらている動詞 lesen, unterrichten, studieren などの場合は、対格目的語と一緒に文を構成する他動詞としても通例用いることができる。それにも関わらず、以下のような、自動詞の中動化を示す特徴が見受けられるのは、その出発点ないしは対応する能動文に対格目的語を取らない場合を想定できるからである。そして、対格目的語を伴う、他動詞としての能動文に対応する中動化も、別に可能なのである。以下の各文の対を対照されたい。

(96) Es tanzt sich gut auf glattem Parkett. (Brinker 1969 : 9)
(96a) Man tanzt gut auf glattem Parkett.

(97) Ein Walzer tanzt sich nicht so leicht.
(97a) Man tanzt einen Walzer.

(98) Es liest sich schlecht bei Kerzenschein. (Brinker 1969 : 9)
(98a) Man liest schlecht bei Kerzenschein.

(99) Das Buch liest sich schwer. (=(85))
(99a) Man liest das Buch schwer.

(100) Es studiert sich leicht in dieser Uni.
(100a) Man studiert leicht in dieser Uni.

(101) Japanologie studiert sich relativ leicht.
(101a) Man studiert Japanologie relativ leicht.

(102) Es unterrichtet sich leicht in dieser Uni.
(102a) Man unterrichtet leicht in dieser Uni.

(103) Deutsch unterrichtet sich nicht so einfach.
(103a) Man unterrichtet Deutsch nicht so einfach.

上記の複数の中動化の可能性については、二つの別個の動詞が語彙的に存在すると考えられることも出来るが、本論では従来の辞書記述にのっとり、同一動詞の自動詞的用法、他動詞的用法という把え方をしておく。

こうした自動詞用法を含めた自動詞文の中動化は非常に生産的である。他動詞の中動化の適用範囲はwerden－受動のそれよりも狭かったが、自動詞文の中動化の場合、逆に中動化の適用範囲の方がwerden－受動のそれよりも広いとさえ考えられる。例文(104)、(105)で用いられている動詞sitzenやwerdenはwerden－受動を形成できないものである。[34] [35]

(104) Es sitzt sich hier angenehm.
(104a)*Es wird hier angenehm gesessen.
(105) Es wohnt sich gut in diesem Dorf.
(105a)*Es wird in diesem Dorf gut gewohnt.

（Ⅲ） 固有再帰動詞[36]

先に触れたように、これは再帰代名詞なしには用いられない動詞について中動化が可能である事をAbrahamが指摘している。

(106) Das stellt sich leicht vor. (Abraham 1987a : 52)
(107) In ihren Kreisen schämt es sich nicht ohne Koketterie, (ibid. : 55)
(108) Am Meer erholt es sich besonders gut. (ibid.)
(109) In einer solchen Atmosphäre verliebt es sich ziemlich einfach.
(110) Unter diesen Umständen entschließt es sich nicht leicht.
(111) So ein Ton verbittet sich bei allen.

これらの例を見て気付くことは、例文(106)、(111)が他動詞の中動化と、また残りの例文が自動詞文及び自動詞用法の中動化とパラレルな関係にあることである。sich vorstellenやsich verbittenの二

つの再帰動詞は義務的に対格目的語を取り、この対格目的語にあたる成分が、他動詞文の中動化同様、中動構文の主語になっている。但し、副詞的成分はやはり義務的である。これに対して、(107)から(110)の例文中のsich schämen, sich erholen, sich verlieben, sich entschließenの場合、能動文では対格目的語を取らない。この、言わば「自動詞性」が原因であろうが、中動化で主語には“es”がたつ。すべての固有再帰動詞文の中動化に共通するのは、本来備わっているsichに中動化による別のsichが重なることはなく、sichは一つしか表層に現われないという点と、やはり、副詞的成分は不可欠であるという点である。さて、こうした固有再帰動詞を出発点に考えるべき中動構文の生産性については、固有再帰動詞そのものが少ない上に、インフォーマント・テストでも許容されたものは本論の例文程度であり、その多寡や条件については何も言えないに等しい。(38)

以上、大まかに中動構文をその基礎となる動詞に従って見てきたが、これを整理するに際しては、Brinkerの三分類を適用した。(39)

(112)

A. 〔行為者〕 + 動詞 + (sich) + 〔対象〕 ⟶ 〔対象〕 + 動詞 + sich + 副詞的成分

B. 〔行為者〕 + 動詞 + 〔対象〕 ⟶ 〔対象〕 + 動詞 + sich

C. $\left[\begin{array}{l}\text{〔対　象〕}\\ \text{〔経験者〕}\\ \vdots\end{array}\right]$ + 動詞 + (sich) ⟶ Es + 動詞 + sich + 副詞的成分

A、B、Cのいずれの場合にも、動詞の左側（前域）に立つ名詞句は主格、動詞の右側（後域）に立つ名詞句は対格の格形態を取る。〔　〕内は各々の名詞句が担う意味役割を示すが、中動化の適用される自動詞文の主語の意味役割にはいろいろあり得るようだ。

A、Cの副詞的成分を必ず取る中動構文は、既に指摘されている通り、(40)属性表現を示し、逆にAbrahamの中動の定義（本論4項参照）から逸脱するBタイプは出来事を示すと言える。即ち、Bタイプの場合は、punktuellな時間上の副詞句（または節）と共起可能である。

Cタイプの構文でも、Aタイプで最もよく用いられる難易を表わす副詞成分が通例使われるが、更にそれ以外のもう一つの副詞的成分が付くのがふつうである。

(113) Es arbeitet sich gut in diesem Betrieb. (藤縄 1986 : 10)

(114) Es fährt sich gut auf der Autobahn. (ibid.)

(115) Es fliegt sich herrlich in dieser Maschine. (ibid.)

(116) Auf diesem Weg in Hochgebire läuft es sich schlecht. (ibid.)

(117) Mit dieser Kanne gießt es sich schlecht. (ibid.)

(118) Aus diesen Gläsern trinkt es sich gut. (ibid.)

(119) Bei diesem Wetter reitet es sich gut. (ibid.)[41]

これは、動詞の表わす行為についての属性表現のみでは、情報度が余りに低いため、殆んど必須な成分として、その属性表現を限定するための副詞的成分が求められると考えられよう。他動詞文の中動化の場合、属性表現の限定が主格主語に立つ〔対象〕成分によって行なわれるため、その必要はない。因みに、難易等を表わす副詞的成分のみにした自動詞文の中動化は文法性が低くなるようである。

(113a) ? Es arbeitet sich gut.

(114a) ? Es fährt sich gut.

(115a) ? Es fliegt sich herrlich.

(116a) ? Es läuft sich schlecht.

(117a) ? Es gießt sich schlecht.

## 2. 中動構文の位置付け

以上、中動構文の現象を大まかに追ってきたが、この現象をドイツ語文法、とりわけ態との関係で、どう取り扱うべきであろうか。

周知の通り、ドイツ語には能動・受動の区別があり、通常〔werden＋過去分詞〕の統語パターンで受動態を代表させている。更には、〔sein＋過去分詞〕というパターンをとる状態受動など、意味的に受動態の変異と考えられるものが幾つか挙げられる。

そもそも、受動態の本質的な特性は何か、という点に関して、Shibatani (1985) は以下のような記述を言語類型論や言語普遍性の観点から行なっている。[42]

(120)

(a) 語用論上の一次的機能[43]

行為者の脱焦点化

(b) 意味上の特性

(i) 意味ヴァレンツ：述語（行為者、対象）

(ii) 主語が何らかの影響を受ける

(c) 統語上の特性

(i) 統語上コード化されていること

Ⅰ. 行為者——→コードから外される

Ⅱ. 対　象——→主語へ格上げ

(ii) 述語Pのヴァレンツ：能動＝P／n

受動＝P／n－1

(b) 形態上の特性

能　動＝P

受　動＝P (+passiv)

Shibataniによれば、こうした条件をすべて満たした言語現象が個別言語に見出されるなら、それが典型的な受動構文、即ち受動のプロトタイプということになる。しかし、世界の各個別言語に見られる受動構文がすべてプロトタイプなのではなく、上の諸条件を満たすとは限らないという点も指摘されている。

では、本論で扱っているドイツ語の中動構文を上記のプロトタイプ条件に照らし合わせるとどういうことが言えるのであろうか。

(a) の行為者脱焦点化は、ドイツ語中動構文によっても満たされている。よく問題とされるように、対格目的語のような主格主語以外の成分の格上げがその構文の中心的機能とする見方に対しては、格上げすべき対格目的語を持たない自動詞文にも中動化が適用できることが反証となるであろう。[44]

(b) の意味上の特性については、他動詞文の中動化であるA及びBのタイプは、これを保持しているが、自動詞文の中動化であるCタイプはプロトタイプから外れていると言えよう。

(c) の統語上の特性についても、(b) の場合同様、中動化の基礎と考えられるのが他動詞文か自動詞文かで扱いが異なる。

タイプBの場合、「行為者」を“von + NP”や“durch + NP”で表わすことは不可能である。

(53a)*Der Wein trinkt sich von ihm gut.

(54a)*Das sagt sich von uns leicht.

(55a)*Das Auto verkauft sich von dem Geschäftsmann gut.

(56a)*Das Problem löst sich von den Studenten einfach.

逆にAの場合、藤縄[45]によれば、“durch + NP”が「原因格」として許容されるという。

(121) Der Zucker löst sich durch die Hitze nuf. (藤縄 1986 : 5)

(122) Das Wasser klärt sich durch die Kälte. (ibid.)

(123) Das Haar lockt sich durch die Feuchtigkeit. (ibid.)

(124) Das Tor öffnet sich durch den Wind. (ibid.)

行為者が完全の姿を消すという点では、タイプBがプロトタイプに近く、タイプAは義務的にではないにせよ、行為者に近い原因が現われうる点でややプロトタイプからそれると言える。両者に共通しているのは、「対象」成分の主語への格上げである。自動詞文の中動化の場合は、コードから外すべき行為者項[46]も無く、格上げすべき対象項も存在しない。[47]

さて、最も問題となる動詞価はどうであろうか。ここで問題となるのは、各タイプ共通の“sich”及びCタイプで現われる“es”である。

"sich" は1.1.で引用したAbrahamの立場に従えば、最早独立した項ではあり得ない。従来の文法用語としての再帰代名詞という命名や、正書法上の独立した語としての扱いなどにとらわれずに、むしろ、その分布状況や純粋再帰用法のsichとの相違を考えるならば、Abrahamの主張する通り、中動マーカーとして把えるのが至当であろう。とりわけ、置かれる位置の制限の強さや形態上の不定性、また他の言語での類似の例などから、中動構文のsichを接辞化したものと見ることにはそれ程無理はないと思われる。[48] [49]

"es" は、中動化の出発点が自動詞や自動詞用法の文の場合、中動構文の主語として現われる。Abrahamは、中動構文のesが二つの性質を持っていることを明らかにしている。[50]中動構文のesは、一方で(125)、(126)のes同様、受動に類似したプロセスを伴い（能動主語の格下げ）、行為者の意味役割の束縛を表わし、他方、(127)、(128)のes同様、統語上不可欠なものとなっている。

(125) Es wird abends auch gearbeitet.

(126) Es wurde gestern getanzt und getrunken.

(127) Es regnet heute.

(128) Es gibt eine riesige Fabrik in der Stadt.

統語上の不可欠性は、語順の変更で明らかになる。

(125a) Abends wird auch gearbeitet.

(126a) Gestern wurde gearbeitet und getrunken.

(127a) Heute regnet es.

(128a) In der Stadt gibt es eine riesige Fabrik.

このesが項の資格を備えているか否かという点で、中動構文のesは、天候動詞等のesと同じであり、統語上不可欠な存在であることが、以下の例文によってもわかる。

(129) Es läuft sich gut hier.

(130) Gut läuft es sich hier.

(131) Hier läuft es sich gut.

以下のesとsichの位置付けを受け入れれば、動詞価の減価という点に関して、A及びBタイプはプロトタイプの性質を滞び、Cタイプは逸脱すると言えよう。[52]

最後に、(d)の形態上の特性を見てみよう。中動構文が非中動構文に比べて有標の形態を示すという点で、受動プロトタイプとの共通性が認められる。つまり、通常の動詞形態にsichという中動マーカーが付加されるとするAbrahamの考えが合理的である。[53]

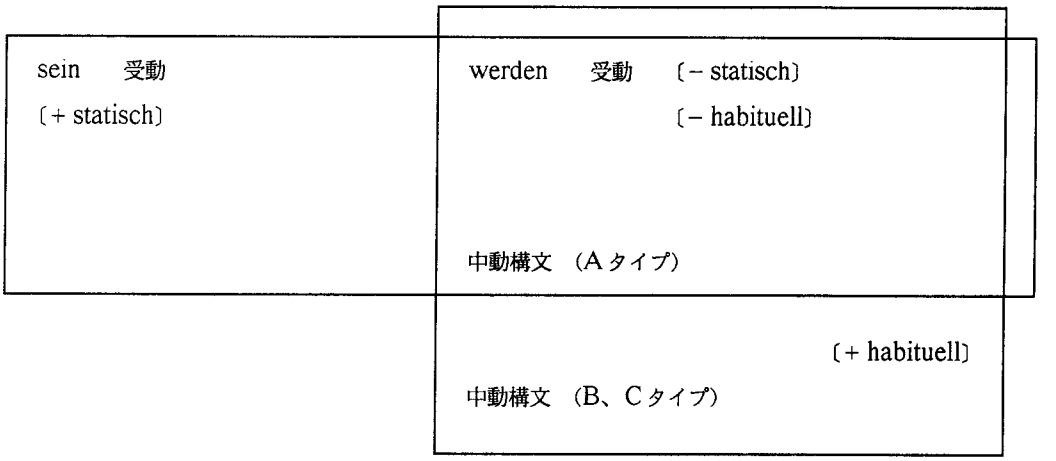
以上を概観すれば、本来中動構文と呼ばれ、扱われてきた現象が、実は受動のプロトタイプとの共通性を数多く持った存在だということがわかる。しかし、現在ドイツ語には、上記の受動プロトタイプに非常に近い〔werden + 過去分詞〕や〔sein + 過去分詞〕という構文も存在するのに、何故また、

中動構文のようなものが存在するのであろうか。そして、受動という現象に関して、一つの言語に幾つもの変異が存在することが特異なことなのであろうか。(54)

ShibataniとKeenanによれば、一つの言語が複数の受動現象を持つことが、その分布状況や機能が異なる限りは可能であるとしている。(55) sein受動とwerden受動の相違がアスペクト上の特性にあるように、werden受動と中動構文の相違も、一方が動作表現、他方が属性表現に主として用いられる点に現われている。「属性表現」を言い換えるのならば、それは「繰り返し可能」な〔+habituell〕ともいうべきアスペクト素性の指定とも言えよう。(56)

これらをまとめれば、図Cのように図式化できる。

〔C〕



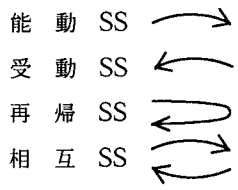

Aタイプの中動構文は属性表現ではなく、一回性の出来事など表わす。その限りにおいて、この中動構文はアスペクト特性〔+ habituell〕を取ることはなく、むしろ通常のwerden受動と同じである。これに対して、B、Cタイプの中動構文は〔+ habituell〕アスペクト特性を、またsein受動は〔+ statisch〕を持つことになる。そして、アスペクト上、有標となるsein受動とB、Cタイプの中動構文とが「行為者」を表層に示すことができず、アスペクト上無標のwerden受動が「行為者」成分を提示できる。これは、有標・無標の分布が、二つの規準について、バランスよくなされていることを意味している。(57) (Aタイプに〔durch +原因〕が付加できるのもこれと関連する。)

| | 行為者と共起 | アスペクトの有標性 |
|---|---|---|
| werden | + | − |
| sein | − | + |
| 中動構文 | − | + |

こうして、Shibataniの言う複数の受動の存在の背後には、各々機能と分布の相異があることが改めて認められた訳である。

ここで、ドイツ語の態体系を見直そう、ここでは、Barber (1975) の図式を用いて、態を表示してみる。Barberの図式は表層主語と動作の方向（起点・終点を含め）とによって表わされている。[58]

〔D〕




※SSは表層主語を、矢印は動作の行なわれる方向を示す。

本論の冒頭に例示したフランス語のse-moyen構文や英語のget受動 ( (133) 及び (135) ) についてBarberは「媒介受動 (catalytic passive)[59]」という命名を与え、以下のような図式を与えている。

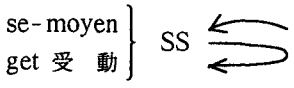
(132) The cat was scratched. (Barber 1975 : 22)

(133) The cat got scratched. (ibid.)

(134) The window was broken. (ibid.)

(135) The window got broken. (ibid.)

(136) Les portes se ferment à deux heures. (ibid. : 23)




Barberはこれら二つの構文に共通するニュアンスとして、「主語が何かしらその行為を自らに向けている」[60]という点をあげている。

そして、こうしたニュアンスを持つドイツ語の現象が言うまでもなく中動構文である。(136) に対応するドイツ語文は (137) となるであろう。

(137) Die Tore schließen sich um zwei Uhr.

勿論、Barberの図式にも問題はある。werden受動でも、また中動構文でも自動詞文を基礎とした場合は、この図式ではとらえられない。表層主語が非指示的なesだからである。また、他動詞文であっても、非行為動詞のようなBarberの図式に適合しないものがあるが、そうした場合、態自体が問題となることが少ない。

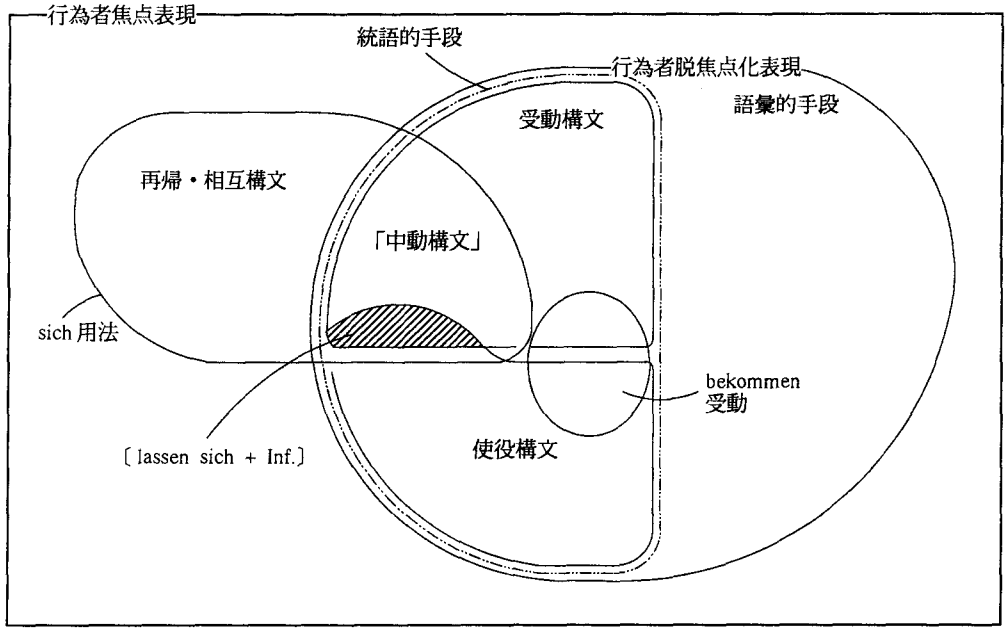
Barberの図式で再確認できたのは、ドイツ語の中動構文に受動の要素である表層主語に向う動作の矢印が認められるという点である。また、理論的に中動となるべき存在は、ここで論じられている現象ではなく、能動と受動との合成である再帰・相互構文であることもわかる。[61]

能 動 SS ⟶ + 受 動 SS ⟵ ⟹ 中 動 SS ⇄ (sich)[62]

再帰と相互との相異は、表層主語が単数であれば、自動的に再帰構文となるし、表層主語が複数の場合、同一指標のSSとsichとが一対一対応で動作の矢印によって結ばれれば再帰構文、それ以外の時に相互構文となる点にある。

中動構文の命名自体は、Barber (1975) に説明されているような、能動—中動の対立から能動—受動の対立への史的移行に基づくと思われるが、ここに論じてきたように、形態素sichの使用される現象に態の混在が隠されていることがわかる。即ち、本論で扱った「中動構文」は、図Eに示されるように、本当の意味の中動と受動の重なり合いであり、ドイツ語に幾つかある統語的な行為者脱焦点化の手段の一つとなっているのである。

〔E〕[63]




## 注

(1) Behagel (1923 – 1932) : Bd. Ⅱ . S. 170f.

(2) Abraham (1987b) 参照。Abrahamは、各言語の中動化について考えられる意味上の制約にも言及している。

(3) Haider (1985), S. 245.

(4) Duden文法、Helbig / Buschaの文法、また、新しいところでは、Engel, U (1988) : Deutsche

Grammatik. Groos, Heidelberg なども、中動構文を受動の一変異として記述している。

(5) Brinker (1969) 参照。

(6) Haider (1985), S. 226.

(7) Duden 文法や Helbig / Buscha 文法を参照。

(8) Reis, M. (1981) : Reflexivierung im Deutschen. Ms. Universität Köln.

(9) Haider (1985), S. 220f. 例文も同所から採用した。

(10) ibid., S. 225.

(11) この文は中動構文であると考えられる。

(12) Abraham (1987a) 参照。

(13) Haider (1985), S. 247.

(14) ibid. Haider は主語という用語を用いず、指定項、厳密には指定外項という用語を用いている。これは以下のように、Haider が定義している。

動詞のような機能的要素がその取るべき項に構造的な指標を付与し、構造格を与えるとすると、そのうち一つは必ず外項として実現される

ドイツ語では、主格、対格が構造格であるとされ、また、外項は述語内にとりこまれない項ということで、主語として通常実現される。

(15) ibid., S. 245.

(16) ibid., S. 246.

(17) ibid., S. 246ff. 英語の能格動詞・中間動詞の区別が連想される。

(18) ibid., S. 247. 通例、これらの動詞を純粋再帰動詞と呼んでいる。

(19) Abraham (1987a).

(20) 中村他 (1989), S. 77 から引用。

(21) Brinker (1969), S. 5.

(22) ibid., S. 8 の注 30a を参照。

(23) 但し、以下の文が許容される理由は明らかではない。

(69a) Seine Stimme hört sich gut an.

(71a) Die Gemälde sehen sich ganz hübsch an.

(24) Brinker (1969) は他動詞からの中動化に二つのタイプ、それに自動詞からの中動化の三つのタイプを立てているが、固有再帰動詞の中動化にはふれていない。注 (17) 参照。

(25) ibid., S. 6ff. Brinker は本文中の例文以外に以下の動詞の用例も集めている。

ankündigen, auftun, bilden, durchwetzen, erheben, gründen, lösen, verbinden, verbreiten, verwandeln, verwirklichen, vollziehen.

(26) 中動動詞か否かは単に独立して辞書記述されているか否かと言えよう。

(27) Brinker (1969), S. 5f.

(28) 本論, S. 4. 参照。

(29) Brinker (1969) による命名である。

(30) Zribi-Hertz (1982), Keyser / Roeper (1984) 参照。

(31) オランダ語も自動詞文の中動化を認める言語である。

(32) Haider (1985), S. 231ff.

(33) 無論、"den Tod eines Helden sterben" や "den Schlaf des Gerechten schlafen" のような例外は除く。

(34) sterben, laufen などの動詞もこのグループに入る。

(35) 本文に挙げた例以外には spuken, helfen, schwitzen, schimpfen, danken, frühstücken, scherzen 等を用いた中動化例が確認されている。但し、インフォーマント・テストでは、すべての文の文法性を裏付ける結果は得られなかった。また、自動詞文でも中動化できない場合もある。

(36) ここには、例文 (106) の sich vorstellen のように、他動詞としての vorstellen が存在するものの、再帰代名詞と共起するとまったく意味が変わるものも含めている。

(37) 言うまでもなく、対格で表わされる副詞的表現はこれに該当しない。動詞価として数えられるような対格目的語に限定される。

(38) 固有再帰動詞以外の再帰構文（勿論、中動動詞は除外）の中動化は、幾つかの例文をインフォーマント・テストにかけてみたが、悉く非文として排除されてしまったため、考察の対象にしなかった。

(39) Brinker (1969), 藤縄 (1986) 参照。

(40) 藤縄 (1986), Abraham(1987a) 参照。
藤縄では「行為に関する属性表現」と「感覚に関する属性表現」とを区分し、状態変化を含意しない行為中心の意味の動詞で作られるとしている。また、本論の B タイプにあたる中動表現では、その動詞の意味が状態変化を含意する結果中心であるとしている。

(41) 例文 (88) から (95) についても、(90) を除いて、二つの副詞的成分が含まれている点は同様である。

(42) Shibatani (1985), S. 837.

(43) Weisgerber (1963) の "täterabgewandt" に通じるものがある。

(44) Comrie (1977) 及び Shibatani (1985) 参照。

(45) 藤縄 (1986), S. 5. しかし、この原因格成分は義務的ではない。

(46) (112) に挙げた中動化パターンのうち、Cタイプの中動化の基本となる自動詞文の主語については、その意味役割を一義的に決定できないようである。

(47) 自動詞文の werden 受動、いわゆる非人称受動とまったくの平行現象である。

(48) Abraham (1987b), S. 6f.
Abraham は、中動マーカーとしての sich と主語との束縛関係を認めた上で、es をその立てる位置が限定されることから、S（文）に付置される存在演算子として説明している。

(49) アイスランド語の "- sit" が接続した中動マーカーの好例であろう。Pétrusson (1987), S. 63f.

(50) Abraham (1987a), S. 63.

(51) 注 (48) 参照。

(52) 無論 es は動詞価に数えられるべき存在だが、意味役割の喪失という変化をこうむっていることも重要な点である。

(53) 既に述べたことであるが、固有再帰動詞の中動文では、本来の sich と中動化による sich との重出が考えられるが、実際には sich は一つだけであり、Abraham は、ドイツ語に sich の重出を禁ずる制約があるとしている。

(54) ここにいう sein 受動とは、Helbig (1983) で区別されている Zustandsreflexiv, allgemeine Zustandsform, 自動詞の sein 完了形を除いた、狭義の Zustandspassiv を指す。

(55) Shibatani (1985), S. 842, 及び Keenan (1985) 参照。

(56) Abraham は "stative passive" という用語を用いているが、sein 受動が動作の結果としての状態を意味するのとは対照的に、中動構文は何度も起こりうる動作をとりこんだ意味の属性を表わすということから、〔+ habituell〕という別個のアクペスト素性をたてた。

(57) 日本語で、文体上無標で語彙的な区別をされる「来る」、「行く」、「いる」が文体上有標（敬体）となると、語彙上の区別を失い、「おいでになる」一形態になる現象と比較されたい。柴谷方良他「言語の構造 —— 意味・統語篇」、S. 118 参照。

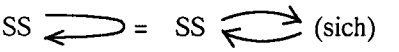
(58) Barber (1975), S. 23.

(59) ibid.

(60) ibid., S. 22.

(61) 自動詞文の受動化、中動化も含めた整理は、次の課題としたい。

(62) カッコ内の sich に一種の「鏡」の機能を与えればよい。結果的には、Barber 自身の再帰に対する図式と等価である。




中動に対する「反射態」という呼び方が的を得たものと言えよう。

(63) bekommen 受動については、Eguchi (1989) 参照。

# Literatur


Abraham,W. (1986) : Unaccusatives in German. Groninger Arbeiten zur Germanistischen Linguistik 28, 1 – 72.

———— (1987a) : Was hat sich in "Damit hat sich's" ? Centre de Recherche en Linguistique Germanique (hrsg.) : Das Passiv im Deutschen. Niemeyer, Tübingen, 51 – 71.

———— (1987b) : Zur Typologie des Mediums in der Westgermania. Abraham, W. / Århammar, R. (hrsg.) : Linguistik in Deutschland. Niemeyer, Tübingen, 3 – 23.

Behagel, O. (1924) : Deutsche Syntax. Bd. II. Carl Winter, Heidelberg.

Brinker, K. (1969) : Zum Problem der angeblich passivnahen Reflexivkonstruktionen in der deutschen Gegenwartssprache. Muttersprache 79 / 1, 1 – 11.

Chomsky, N. (1981) : Lectures on Goverment and Binding. Foris, Dordrecht.

Comrie, B. (1977) : In Defense of Spontaneous Demotion : The Impersonal Passive. Cole, P. / Sadock, J. M. (ed.) : Syntax and Semantics Vol. 8. Grammatical Relation. Academic Press, New York, 47 – 58.

Duden (1984) : Grammatik der deutschen Gegenwartssprache (4. Aufl.). Bibliographisches Institut, Mannheim.

Eguchi, Y. (1989) : Ist das ein Passiv ? Hokkaido Daigaku Bungakubu Kiyô 37 / 2, 147 – 172.

Fellbaum, C. (1985) : Adverds in agentless actives and passives. CLS21 / 2, 21 – 31.

藤縄 真由美 (1986) :「物・事」を主語とする再帰表現についての意味論的一考察. Der Keim 10, 1 – 12.

Haider, H. (1985) : Über sein oder nicht sein : Zur Grammatik des Pronomen sich. Abraham, W. (hrsg.) : Erklärende Syntax des Deutschen. Narr, Tübingen, 223 – 254.

Heidolph, K. E. u. a. (1984) : Grundzüge einer deutschen Grammatik. Akademie - Verlag, Berlin.

Helbig, G. (1983) : Zustandspassiv, sein - Passiv oder Stativ ? derselbe : Studien zur deutschen Syntax. Bd. I. VEB - Verlag, Leipzig, 47 - 57.

Helbig, G. / Buscha, J. (1986) : Deutsche Grammatik ( 9. Aufl.). VEB - Verlag, Leipzig.

Keenan, E. L. (1985) : Passives in the world's languages. Shopen, T. (ed.) : Language typology and syntactic description. Cambridge University Press, Cambridge, 243 – 281.

Keyser, S. J. / Roeper, T. (1984) : On the middle and ergative construction in English. Linguistic Inquiry 15 / 3, 381 – 416.

中村　捷 / 金子義明 / 菊地　朗 (1989) : 生成文法の基礎。研究社出版、東京。

Shibatani, M. (1985) : Passives and related constructions : a prototype analysis. Language 61, 821 – 848.

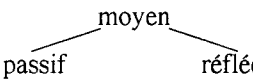
———— (ed.) (1988) : Passive and voice. John Benjamins, Amsterdam.

Wagner, F. (1977) : Reflexivkonstruktionen und Genera verbi. Sprachwissenschaft 2, 302 – 338.

Weisgerber, L.(1963) : Die täterabgewandte Diathese. derselbe : Die vier Stufen in der Erforschung der Sprachen. Schwann, Düsseldorf, 223 – 261.

Williams, E. (1981) : Argument structure and morphology. The Linguistic Review 1, 81 – 114.

Zribi - Hertz, A. (1982) : La construction "se - moyen" du Français et son statut dans le triangle




Linguisticae Investigationes VI / 2, 345 – 401.

（文学部助手）